

機関番号：32641

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520524

研究課題名(和文) 日本語話者による英語の複合名詞の習得と使用

研究課題名(英文) Japanese learners' acquisition and use of compound nouns

研究代表者

若林 茂則 (WAKABAYASHI SHIGENORI)

中央大学・文学部・教授

研究者番号：80291962

研究成果の概要(和文)：

英語の「名詞+動詞+接尾辞-er」の形を持つ複合名詞は生産的で、「猫を食べる人」を *cat eater* のように表すことができる。英語を母語として習得中の子供やスペイン語を母語とする英語学習者は、この複合名詞の使用において、語順や形態素の使い方を誤ることが知られていた。本研究では2種類の実験で日本語話者も誤りを産出するが、その誤りは他の学習者とは種類が違ふことを明らかにした。先行研究ならびに本研究の結果に基づいて、誤りの原因は文構造規則の単語構造への適用と、別の形態素(-ing)の誤用にあると論じた。

研究成果の概要(英文)：

English compound nouns (Noun + Verb + *-er*, e.g., *cat eater*) are productive. It has been reported that children learning English as their mother tongue and Spanish speaking learners of English as a second language produce errors in places where this kind of compound should be used. The results of two experiments in this study showed that Japanese speaking learners of English also make errors but the kinds of errors are different from those produced by other learners. Based on data from previous studies and from this study, it was suggested that the errors are attributable to: 1) the application of syntactic rules to morphological operations, and 2) errors in the use of other morphemes (i.e., *-ing*).

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：第二言語習得、日本人英語学習者、複合名詞句、派生形態素、語順、屈折形態素、数、分散形態論

1. 研究開始当初の背景

(1) 動作主を表す動詞由来複合名詞(例 *truck driver*) は、生産性が高く、英語を母語して習得中の子供が、特定の誤りを産出することが知られている。主な誤りは、派生形態素-erの脱落や-ingによる代替(例 *truck drive*、

truck driving)、語順の誤り(例 *driver truck*、*drive truck*、*driving truck*)、および、複合名詞句内のテーマを表す名詞の複数形の使用(例 *trucks drive / trucks driver*)である(例 Clark, Hechet and Mulford, 1968)。第二言語学習者からも類似の誤りが産出され

るという報告がある（例 Lardiere and Schwartz, 1997）。これらの現象に対して、言語学に基づく十分な説明がなされておらず、また、そこから母語習得や第二言語習得の本質を探るといふ研究も不十分であった。

(2) 語順の誤りと名詞の複数を表す形態素-sの使用については、それぞれに関する研究がなされてきたが、それらを合わせた形で論じているものではなく、そのため、母語習得や第二言語習得における習得のメカニズムをより大きな枠組みでとらえることができていなかった。

(3) 第二言語習得に関しては、日本語を母語とする英語学習者については、ほとんど研究されていないため、日本語話者による英語の複合名詞の習得と使用に関する実証的データを集め、これまでの研究と照らし合わせながら、第二言語習得の仕組みについて議論する必要があった。

2. 研究の目的

日本を母語とする英語学習者の複合名詞（例 truck driver）の産出データを基に、中間言語の知識と使用のしくみを明らかにし、さらに、先行研究との比較を通して、第二言語習得における拘束形態素使用に見られる誤りの原因を探り、一般的な第二言語習得モデルに反映させることにあった。

また、先行研究を分析していく中で、母語習得に関する理論的説明が不十分であることも明らかになったため、母語習得中の子供による複合名詞の使用に見られる誤りに関する理論的考察を行うことも目的の一つに加えた。

3. 研究の方法

(1) 母語習得に関する論文の再分析のために、まず、分散形態論による Harley (2009)の英語母語話者の大人の文法における複合名詞の派生を採用し Clark, Hecht and Mulford (1986)、並びに Nicoladis and Murphy (2004) のデータを再分析した。

(2) 97名の日本語を母語とする英語学習者を Oxford Placement Test によって、初級 21名、中級 28名、中上級 29名、上級 19名に分け、これらの学習者と 24名の英語母語話者を対象に、筆記による産出タスクを行った。参加者にある人物が何かをしているところを描写した英語の文脈（例 There is a person watching a mouse. What could you call a person who watches a mouse?）と写真を提示し、その人物を言い表す一言の英語を 15秒以内でできるだけたくさん書き記してもらった。実験材料には、ターゲットの 18

問を含む計 37問を出題した。（その結果については 4 (2)(4)で述べる。）

(3) 3 (2)に述べた産出タスクに文法性判断を問う質問を加えた文法性判断タスクを作成した。産出タスクと同様に、ある人物が何かをしているところを描写した英語の文脈と写真を提示し、その人物を言い表した英語の複合名詞が文法的に正しいかどうかを 5段階（-2「絶対に正しくない」から+2「絶対に正しい」）で判断してもらった。実験材料には (a) *V + O PERSON（例 *watch mouse man）、(b) O + V(-er)（例 mouse watcher）(c) *V(-er) +（例 *watcher mouse）(d) O + V(-ing) PERSON（例 mouse watching man）(e) *V(-ing) + O PERSON（例 *watching mouse man）の 5タイプの複合名詞を各 8個（計 40個）用意した。（このタスクによるデータ収集の 1回目は西海(2010)による。その結果については 4 (3)(4)で述べる。）

4. 研究の成果

(1) 母語習得に関する先行研究のデータ再分析並びに、そこからの母語習得の仕組みに関する示唆は以下の通りである。Clark, Hecht and Mulford (1986)では、産出に見られる複合名詞句内の要素の語順にのみ注目している。一方、本研究では Nicoladis and Murphy (2004) によって示された、複合名詞内の N と V の語順と、N に対する複数を表す形態素-sの付加の關係に着目し、複数を表す形態素-sが、V(-er) + N の語順の時にのみ N に付加される場合があることから、これまでの研究では、V(-er) + N の産出が線的順序における誤りと見なされてきたものの、実際には、N は（表面的には）単独であるが、構造上は Phrase をなしていると考えるのが自然であり、V(-er) + N の産出が名詞句 (V(-er) of N)における of の脱落の結果であることを指摘した。現在の言語理論 (Harley, 2009) では of は PF における内在格の書き出しのための語彙挿入と考えられることから、Clark et al., (1986)による「形態が統語に先んずる」という記述は正しくない。また、インプットにない形式のうち、特別な形式のみを誤りとして産出することから考えると、母語習得はインプットのみに依存して行われるという考え方 (Nicoladis, 2003; Nicoladis and Murphy, 2004) も誤りであることを指摘した。以上から、母語習得においては、構成素を併合してより大きな構成素を作りだす統語知識は、統語構造に組み込まれた語を形態に置き換える形態部門での操作や、語彙部門における列挙に範疇素性を一貫して取り込む操作よりも前に習得されると提案した。

(2) 前節 3 (2) で示した日本語母語話者を対象とした産出タスクにおいてターゲットとなった 18 問に対し、学習者が答えた計 2,444 件の回答から (a) スペルミス (b) 実験目的と関係のない語による表現 (c) 関係節を用いた表現 (d) 分詞を含んだ表現を含む回答 771 件を除いた産出は、計 1,673 件である。その産出に見られた複合名詞の種類は表 1 のようにまとめられる。(N の単複については考慮していない。)

表 1: 産出タスクの結果

複合名詞 タイプ	日本人英語学習者					合計
	英語 母語話者 (n=24)	上級 (n=19)	中上級 (n=29)	中級 (n=28)	初級 (n=21)	
O+V-er	378	228	289	248	83	848
O+V-ing PERSON	115	109	153	50	14	326
V-er of O	69	2	2	20	1	25
V-er	67	49	49	53	13	164
V-ing+O PERSON	2	30	38	60	68	196
V-ing PERSON	1	25	19	35	20	99
O+V-er PERSON	1	0	2	12	1	15
その他	0	2	14	23	23	62
合計	633	443	552	478	200	1673

ここに見られる通り、全ての学習者グループで母語話者と同様の形、すなわち、V-er、O + V-er、O + V-ing PERSON の産出が見られた (ただし、V-er of O の産出はほとんど見られなかった)。その一方で、日本人英語学習者が産出する複合名詞には大人の母語話者が産出しない *V-ing PERSON や *O + V-er PERSON なども見られた。主要部と補部の語順の誤りについて見ると、日本人英語学習者は、英語を母語として学習する子供 (Clark et al., 1986) やスペイン語を母語とする英語学習者 (Lardiere & Schwartz, 1997) と同様に *V-ing + O PERSON を産出する一方で、これらの学習者とは異なり、どのグループの日本人英語学習者も *V-er + O を産出しなかった。この結果は、日本人英語学習者は発達の早い段階で既に英語の V-er は補部の名詞の格を照合できないという知識を、目標言語のインプット、または、母語の知識 (例 テニスプレイヤー) から獲得していると考えられる。また、日本人英語学習者の産出した *V-ing + O PERSON という誤りは、日本語の複合名詞が OV 語順であることから、母語の影響で生じた誤りではないと考えられる。この誤りは、句構造の語順 ([VP V NP] と [NP Modifier N]) を複合名詞形成に用いた結果現れた誤りであると考えられるのが自然だろう。このように考えると、第二言語学習者にとっては、句レベルの規則の方が語レベルの規則よりも習得し易いことを示している。

(3) 前節 3 (3) に示した文法性判断タスクによるデータ収集の結果 (西海, 2010) は、右上の図 1 の通りであった。

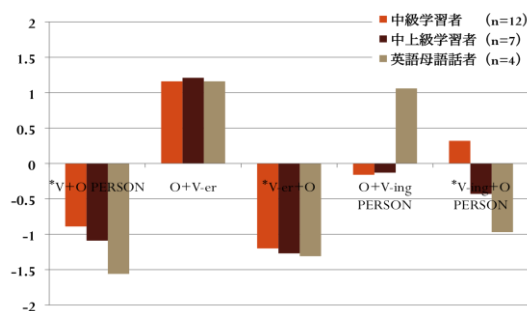


図 1: 判断タスクの結果

図に示された通り、日本人英語学習者は英語母語話者と同様、*V + O PERSON を正しくないと判断した。この結果は、中級レベルの学習者は既に動詞由来複合名詞形成における派生形態素 (-er または -ing) の必要性を習得していることを示しており、この結果は産出タスクの結果と同様である。また、V-er を含む複合名詞の場合においても、母語話者と同様に O + V-er を容認し、*V-er + O を容認しなかった。この結果も産出タスクの結果と一致している。以上の結果から、日本人英語学習者が *V-er + O を産出しないのは、学習者が単にこれらの形を「回避」(Schachter, 1974) し、使用しなかったのではなく、V-er を含む複合名詞に関して、正しい語順と誤った語順を区別する知識を持っているためだと考えられる。この判断は、V-er は補部の NP の格を照合できないという知識を学習者が持っているためであろう。一方、V-ing を含む複合名詞では学習者の判断は母語話者とは異なっていた。母語話者は O + V-ing PERSON を容認し、*V-ing + O PERSON を容認しなかったが、学習者の判断はどちらの場合も判断ははっきりした傾向を示さず、-0.5 から +0.5 の範囲に収まっていた。言い換えれば、学習者は V-ing を含む刺激の場合、判断が揺れている。この判断の揺れは、V-ing は、あるときは名詞に先行し (例: a running boy)、あるときは名詞に後続する (例: a boy running over there) という学習者を混乱させるインプットが原因と考えられる。

(4) 前節 3 (2) の産出タスクにおいて、刺激の絵の示す「動作の対象」が複数である場合、(例 「大人が子供を 3 人保護している場合」「男性が何枚も靴下を破っている場合」)、N が不規則複数を持つ場合 (例 child / children) においても、規則形複数を持つ場合 (例 sock / socks) においても、複合名詞の語順で複数形名詞が用いられる産出 (例 children protector、socks ripper) が見られた。このことは N + V -er の形を持つ複合名詞の N は一般的に規則複数形 (-s) を取らないという「規則」(Kiparsky, 1982) に違反して

いると考えられる。この「規則」は、1980年代には生得的文法知識に基づくものであるという議論が主流であった (Gordon, 1985) が、最近の研究ではこの「規則」自体の心理的実在性が問題視されている (Lardiere, 1995, Urano, 2005)。本産出タスクにおける不規則複数形ならびに規則複数形の産出は、このような形がインプットには見られないことから、日本人英語学習者の産出が、単に記憶の再生ではなく「生産的」なものであることを示唆している。

(5)前節3(3)で述べた文法性判断タスクにおいて、刺激として与えられる絵に含まれる、動作対象を示す名詞が複数の場合、N + V-erの形を持つ複合名詞のNが複数形になっている形 (例 children protector、socks ripper) に対する判断 (-2 から+2 の5段階) のグループ別平均値を表2に示す。

表2 複数形を含む複合名詞

	不規則複数 (children protector)	規則複数 (socks ripper)
中級学習者(n=12)	1.42	1.04
中上級学習者(n=7)	1.00	1.18
英語母語話者(n=4)	-0.63	-1.00

平均値で見ると、英語母語話者の場合、規則複数形の方が不規則複数形より文法性が低いと判断されているが、日本人英語学習者の場合両グループともいずれも平均が1.0以上あり、複数形が用いられた形を容認しているとみなすことができる。したがって N + V-er の N には複数形を用いることができないという規則は働いていないと考えられる。

(6)母語習得に関する先行研究のデータの再分析と第二言語習得に関する2つのデータ収集の結果の分析結果を比較することによって、母語習得と第二言語習得の共通点と相違点が明らかになった。共通点としては、インプットに見られない形が産出されたことであり、これは、母語習得においても第二言語習得においても、複合名詞(に相当する形式)が生産的に用いられていることを表す。一方、相違点としては、母語習得の場合、語順の誤りとNの複数形の誤りに相関関係があるが、第二言語習得ではそのような相関関係がないことが挙げられる。母語習得の場合、多くみられた誤りはofの欠落である。一方、第二言語習得の場合、-ingを用いた場合の語順の誤り、および、N+V-erのNを複数形にする誤りが多い。

この事実は、母語習得と第二言語習得の最終到達度の違いについて重要な知見をもたらす。すなわち、母語習得の場合、子供は、

内在格の書き出し時点での語彙選択を習得することによって、英語を母語とする大人の文法を習得すると考えられる。すなわち、インプットに肯定証拠として存在する、内在格を表すofの習得によって、目標言語の規則が習得される。一方、第二言語学習者の場合は、-ingに関わる形式の誤りは、インプットにおける語順の非一貫性のため、目標言語の文法習得は困難であると予測できる。また、句構造に関わる統語規則を複合名詞生成に応用することによる誤り(すなわち、N+V-erのNを複数形にするという誤り)は「統語規則の語彙規則への応用は不可である」という否定証拠が得られないことから、英語母語話者と同じ文法を習得することは困難であると考えられる。

(7)上記(6)の考察が正しいとすれば、なぜ、英語を母語として習得する子供は-ingを含む形式のインプットに見られる語順が一貫していないにもかかわらず、第二言語学習者と同じような困難さを示さないか、また、なぜ統語規則を複合名詞生成に応用しないかという問題があげられる。この母語習得と第二言語習得の違いは、子供と大人の作動記憶容量や情報処理量の違いに起因すると考えられるが、詳細な検討は今後の課題としたい。

(8)日本人英語学習者の複合名詞生成に見られた語順の誤りは、学習者の母語である日本語の文法をそのまま英語に応用したのではなく、学習者のもつ英語の中間言語文法の統語規則を複合語生成に応用したために起こったと考えられる。この点から、第二言語習得は、少なくともある時点以降は、母語からは独立した形で行われる部分があると言える。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計7件)

- ① Wakabayashi, Shigenori, Lexical learning in second language acquisition: optionality in the numeration, *Second Language Research*, 査読有、Vol. 25、No.2、2009、335-341
- ② Hokari, Tomohiro and Wakabayashi, Shigenori, Null prepositions in wh-questions and passives, *Proceedings of the 10th Generative Approaches to Second Language Acquisition Conference*, 査読有、2009、35-45
- ③ 若林茂則, The NICT JLE Corpusに基づくWh語およびWh疑問文の産出調査、人文研紀要 (中央大学人文科学研究所)、査読無、63巻、2008、203-224

[学会発表] (計4件)

- ① Wakabayashi, Shigenori and Hokari, Tomohiro, Applying phrasal rules to lexical syntax in deverbal compounds in L2 English、European Second Language Association (Eurosla 20)、2010年9月2日、Università di Modena e Reggio Emilia
- ② Wakabayashi, Shigenori、Why do we need an adequate theory to describe and explain learners' behaviors?、The 27th International Conference of English Teaching and Learning in the R.O.C 2010年5月2日 高雄師範大学
- ③ 若林茂則、言語習得と教室活動、中央大学英米文学会、2009年12月19日、中央大学
- ④ 穂莉友洋、What makes prepositions null?: Consideration from null prepositions in pseudo-passive sentences、European Second Language Association (Eurosla 18)、2008年9月11日、Universite de Provence

[図書] (計2件)

- ① 若林茂則、他、中央大学出版部、文法記述の諸相 (中央大学人文科学研究所研究叢書 54)、2011、211-230
- ② 若林茂則、他、大修館書店、英語教育用語辞典改訂版、2009、377

6. 研究組織

(1)研究代表者

若林 茂則 (WAKABAYASHI SHIGENORI)
 中央大学・文学部・教授
 研究者番号：80291962

(2)研究協力者

穂莉 友洋 (HOKARI TOMOHIRO)
 中央大学・大学院文学研究科・博士後期課程